

2011年10月 アカデミックセミナー要旨

設備投資研究所

講師：GRIPS Associate Professor, Jeong Hyeok

演題：The Experience Premium

日時：2011年10月6日（木）15：30～17：30

要旨

本研究は、就労経験から得られる収益が長期的に大きく変動しているという現象を労働市場の供給側要因、特に労働力の人口動態の変化に着目して実証的に分析するものである。

論文では、総労働サービスを「経験」要素（経験を高める効果のある労働サービス）と「労働」要素（経験を高める効果のない労働サービス）に分解し、経験要素の労働要素に対する相対価格を経験プレミアムと定義している。経験要素の労働要素に対する相対的な供給量は、2つの要素間の補完性を考慮した生産関数によって規定される。

推計では、1968年から2007年にかけての米国の家計を対象としたパネルデータであるPanel Study of Income Dynamics (PSID) が用いられる。PSIDにより実際の就労経験が測定される。就労経験が経験要素のみに影響を与える一方、年齢は経験要素と労働要素に影響を与えるため、就労経験と年齢が賃金に与える影響を分離することが可能となる。

モデルでは、ミンサーの賃金方程式を用いて、個別労働者の賃金を労働要素に対応する部分と経験要素に対応する部分に分割している。方程式において、経験プレミアムは経験要素に関する時変的な係数として特定化される。個別労働者の生産性に影響を与える変数（教育年数・性別・人種・地域等）は対数型の賃金方程式に加算する形で導入されている。

賃金方程式は個別労働者の賃金に十分適合するように特定化されている。この方程式は、経験プレミアムが経験要素の労働要素に対する相対的な需要と供給のいずれに由来するかを考慮していない。しかし、推計の結果、経験プレミアムと経験要素の労働要素に対する相対的な供給の相関係数が -0.92 となった。このため、経験プレミアムの推移は、供給側要因だけでほぼ完全に説明できるといえる。

関連する先行研究としてKatz and Murphy (1992) とCard and Lemieux (2001)がある。Katz and Murphy (1992)は、大卒労働者が高年労働者であることによる賃金プレミアムが1963年から1987年にかけて低下傾向にあることを示している。また、Card and Lemieux (2001)は、1973年以降、若年労働者が大卒であることによる賃金プレミアムが上昇傾向にある一方、高年労働者が大卒であることによる賃金プレミアムは一定であり、高年労働者の相対的な賃金プレミアムが低下していることを示している。本研究は、経験要素の労働要素に対する相対的な供給によって説明される経験プレミアムと高年労働者であることによる賃金プレミアムの変化が上記のような規則性を発生させることを明らかにしている。

以上